

八中2年人権だより

徳島市 八万中学校
2年生 第10号
2023年 9月27日
編集・発行 吉成正士

(9号からのつづき)

「かわいそう」ではなく、「ありがとう」を

■「夕凧の街・桜の国」を観て、原爆が落とされた数カ月間だけが原爆のことで苦しむのではなく、数年、数十年した後でも苦しむのを初めて知りました。数年たっても被爆者だと言われ、差別されるのを避けるために、無理して忘れようしたり、フラッシュバックのように記憶から出てきたり、今の私では想像できない恐怖があるのだと思いました。

原爆が広島に落とされてもう何十年も経ち、経験者が亡くなって、記憶がどんどんなくなっていく今だからこそ、戦争への学びをたくさんして、その記憶を忘れたくないと思いました。今生きている私たちは、過去に亡くなった人たちのおかげで生きているのだと私は思っています。そのことを、私は死ぬまで一生考えていきたいです。過去の人に「かわいそう」ではなく、「ありがとう」と伝えられる、幸せな人生を歩んでいきたいです。 2組AK

今を平和に生きていることを思いながら

■僕は「夕凧の街・桜の国」を観て、とても心が苦しくなりました。広島で原爆で亡くなった人の話だったからです。原爆で亡くなった人は苦しみながらやけどで亡くなった人ばかりで、とても戦争の恐ろしさが分かる動画でした。原爆では人の皮膚がただれ落ちて、とても苦しい状態で亡くなった人が何人もいて、僕は心が痛くなりました。動画で出てきた皆美さんも、最後は原爆の病気で亡くなって、その姿を見たら、とても悲しくなりました。これからは自分たちが今を平和に生きていることを思いながら、一つ一つのことを考えて、昔の人に感謝をしながら生きていきたいと思いました。 3組YH

自分は生きていて幸せと思っているのか

■僕は「夕凧の街・桜の国」を観て、たくさんを知ることができました。原爆の被爆者たちがどんな思いで生きていたかということを知りました。原爆が投下されてたくさんの人々が焼けて死んでいくのを見ていながらも自分は生きているということがどんなにつらいことが分かりました。家族や友達は苦しんで死んでしまったのに、自分はずっと生きていて幸せと思っているのかなとか被爆者の方たちはそういうことを思いながら生きていたことを知って、とてもつらいなと思いました。それぐらい原爆はたくさんの人に怖さを与えていたんだなと知りました。このようなことがあったことをこれからも忘れないようにしたいです。 6組IS

私は何のために生きているのか

■私はこのドラマを見て、取り残された被爆者は、何十年もつらい思いをして生きていかなければならなかったということを知りました。私は被爆者でもなければ、この時代に生きていた人でもないけど、このドラマを見てから、被爆者やその家族、子孫の一部になれたような気がしました。普段、私がのうのうと暮らしている日々も、楽しい幸せと思える日常も、苦しいものやつらいものによって変わってしまいます。そのことを知ったときに、これからどのように「生きる」と向き合っていくか考えることが、私にとって必要なことだと思いました。

まず、第一にこんなつらい過去の記憶を忘れさせないように、語り継いでいくことが何よりも大切なことだと思います。そして、私が何のために生きているのかを日々考えなくてはなりません。自分自身が被爆者のためにも、1日1日を大切にしなければならないと思うことができました。 3組OS

人は新しいことを覚えるために、古い記憶やどうでもいい記憶は忘れるようにできているそうです。つまり、忘れることで覚えられる、のだそうです。だから、忘れてしまうのは当たり前。仕方ないことです。

でも、人は忘れる生き物だとしても、「忘れていいことと、決して忘れてはいけないこと」があるのだと思います。ヒロシマやナガサキの原爆、オキナワの地上戦の記憶、戦争の記憶なんかがそうなのだと思います。

自分が幸せを感じる時、例えば食べる時、眠る時、何かをもらった時、笑えた時、幸せを感じた時、そうしたくてもできなかった人のことを想い起こし、「ありがとうね」と、心の中で手を合わせられる人でありたいと思います。そういった人たちの願いのもとに、今の私たちは生きていられるのですから。

原爆はすべての人の夢を奪う

■今まで原爆が落とされた後の話をあまり聞いたことがなかったので、落とされた後も何十年も苦しんでいる人がいることをとてもよく知れた。原爆から生き残った人が自分を責め続け、なぜ自分は生き残っているんだろうと考え続けながら生きていたことを知って驚いた。

でも、もし自分だけが生き残ったとしたら、自分が生きている意味が分からないという気持ちが、痛いほどよく分かった。そんななかでも必死に生きてきた皆美さんのような人があると思うと、とても悲しい気持ちになるけど、それ以上に私も、生きていてくれてありがとうと心から思った。

また被爆した人もそうではない人も、原爆症によって苦しめられていることが分かった。必死の思いで生き抜いてきたのに、何十年も経った後に、病で大変な思いをしたり、亡くなってしまったりするのが、本当に悲しいし、悔し

いと思う。被爆したから、結婚や夢を諦める人もいたことを知り、原爆は、原爆で亡くなった方の夢、そして残された人たちの夢まで奪ってしまったのだと思うと、とてもつらい、原爆や戦争は許されないことだと思った。

私はこれまで生き抜いてくれた人たちへの感謝の気持ちを忘れずに、平和をつないでいきたいと思う。

4組KN

「もうひとり人を殺せてうれしいですか？」

■被爆者の方の思いがとてもよく分かった。「自分は生きていていいのか」という言葉が衝撃で頭に残った。被爆者の方は、ただ悲しみ、怒り、後悔だけの感情ではなく、もっと複雑な「自分はどう生きればよいのか」という考えにまで追いつめられるのだと分かった。原爆が落ちたとき、周辺に苦しみながら亡くなり切れずにさまよっているのを見ると、確かに追いつめられると思う。でも物語のように、そんなふうにならなくて選ぶ権利もなく、亡くなった人たちがいる。だからこそ、自分が幸せに精いっぱい生きなければ、世代をどんどんつないでいかなければという使命が今、生きる人たちみんなにあるのだと思った。

遠い先祖から思いが繋がっていて、主人公の七波たちの家族はいろんな人に見守られているような感じがした。皆美さんが「原爆を落とした人たち、もうひとり人を殺せてうれしいですか？」という言葉を書いて、「生きたい」現実を奪われて、ひどく心が痛めつけられていた。復讐は何も生まない。正しい人生の歩み方、生きていく意味、深い考えが学べた。命は大事に、他人も自分も等しい命、尊重し合える心を常に持つことが大切。

4組SH

今を精いっぱい生きよう

■私は「夕風の街・桜の国」を観て、原爆後の現代でも戦争は深く関係していると思いました。観ている中で驚いたのは、原爆症が終戦して10年経っても症状が出るということです。私は今まで原爆症は終戦して1年以内に出てくるものだと思っていましたが、今日新しく知識が得られました。

また、これまで被爆して差別を受けるということは知っていましたが、「同じ日本人で同じ苦しみを味わったのにどうして差別をしたんだろう」という今までの疑問が分かりました。戦争の時代に生まれなかった自分は戦争を経験していない分、たくさん戦争について学んで、してはいけないと理解するのが自分にできることだと改めてとても思いました。そして戦争の時代の人の分まで今を精いっぱい生きようと思います。

3組DI

まず原爆症にならなければそれが一番ですが、原爆症となって認定されると、保険がききますから医療費はかかりません。国が負担します。そもそも戦争を起こした国に責任があるのですから、当たり前です。

でも認定されなければ、自己負担となります。「えっ？認定されない人がいるの？」と感じた人もいるかもしれませんが、いるのです。

原爆が投下されて爆発したあと、原子雲(きのこ雲)が発生します。それはのちに、様々なものを巻き上げて燃え残った灰「死の灰」や、雲の下で降った雨「黒い雨」となって、降り注ぎました。たいしたことないように思うかもしれませんが、そこには確実に放射性物質が含まれています。

「雨がパラパラと降り、畑の作物にも灰が積もった」

「灰や燃えかすが降り、雪のように積もっていた」

畑の野菜に降った灰を洗って食べた人もいれば、洗う水を飲んだ人もいたそうです。その水は、灰や雨が降り注いだ井戸から汲んできた水です。灰を洗っても、一度汚染された野菜は、汚染されたままです。そういうのを、外部被ばくとか、内部被ばくと言います。

直接的な被ばくしか認めていなかった国に対して、「黒い雨」や「死の灰」で被ばくした人にも被ばく手帳を、と闘ったのが『黒い雨』訴訟といわれる裁判でした。判決はいつ出たと思います？一昨年、2021年です。長すぎると思いませんか？実際に運用されたのは、昨年、2022年からです。新たに被ばく者と認められ被爆手帳を手にしたのは、広島県内で約3000人。それですべて解決したかということ、そうでもありません。認められず却下された人が23人いたということです。「手帳を申請したけどね、市に『黒い雨に遭ったということが確認できん』と言われて、却下された。わしは実際に雨を浴びたのに、ひどお腹がたつ。とても納得できんけえ、相談に来た」

80歳を過ぎたおじいさんの言葉です。脳梗塞、前立腺がん、ヘルニア、白内障、半身不随と、不自由なおじいさんの身に国から届いた通知書には、「あなたの被爆事実の確認ができませんでした」とだけ。

「実際に雨を浴びたんじゃけえ、わしは闘うよ。死ぬまであきらめん」

今年1月のお話です。まだ原爆は終わっていません。「黒い雨」にうたれて被爆した人、投下後に被爆地に入って被爆した人、皆美さんのように長い年月が経ってから原爆症を発症した人、いったいどこまでが被爆者で、どこからが被爆者ではないのか。いずれにしても、戦争を起こした国には責任があるわけですから、訴えるすべての人を救済してほしいものです。

また、被ばく者への補償を認めないということは、いまだに、「間違ったことをした」と認めていないということになりはしないでしょうか。この闘いは、国に、「間違ったことをした」とちゃんと認めさせるための闘いでないかと思います。福島の問題もそうです。そのような国の姿勢が透けて見えてくると、この国を信用できない国民がいたり、国があってもおかしくありません。

(11号につづく)

